

事業報告書

平成 22 年度
(2010 年)

自 平成 22 年 4 月 1 日
至 平成 23 年 3 月 31 日

社団法人 日本コントラクトブリッジ連盟

目次

平成 22 年度事業報告概要	1
普及事業部	6
競技会事業部	25
国際交流事業部	27
その他の事業	30
九州支部	32
福岡ブリッジプラザ	34

平成 22 年度事業報告概要

(自平成 22 年 4 月 1 日 至平成 23 年 3 月 31 日)

1. 役員改選および人事異動

本年度は、JCBL の運営体制に大きな変化があった年であった。平成 22 年 5 月 29 日、第 29 回会員総会で任期満了に伴う役員の改選が行われ、理事 18 名と監事 2 名が選任された。うち、留任は理事 9 名、監事 0 名、新任は理事 9 名、監事 2 名であった。また、同日開催された第 164 回理事会で、役員互選の審議が行われ、常任役員、各担当理事、各委員会委員長が選任された。前期理事会の藤田公郎会長、野崎武副会長、木村修躬副会長、宮国健次副会長が退任したことから、細田博之氏が会長に、鳩山勝郎氏、平田眞氏、山口知也氏が、それぞれ副会長に選任された。

事務局でも人事異動があり、8 月末で吉田正事務局長兼国際交流事業部長が定年退職したことに伴い、9 月 1 日付けで大政哲人競技会事業部長が事務局長兼国際交流事業部長に就任した。また、9 月に渡辺由実氏を事務局員として採用した。さらに、九州支部においても、年度初めに、緒方世喜子初代支部長の退任に伴い、小山紘氏が新支部長に選任された。本年度は、この新たな体制のもとで一層の飛躍を遂げるべく、事業活動にのぞんだ。

会 長：	細田博之
副 会 長：	鳩山勝郎、平田眞、山口知也
常任理事：	ロバート・ゲラー、島村京子
監事：	水谷建、宮内宏
担当理事	
財務担当：	鳩山勝郎
総務担当：	兼岩芳樹
競技会担当：	寺本直志
普及担当：	齋藤陽子
広報担当（新設）：	山田和彦
ユース担当：	ロバート・ゲラー
国際交流担当：	中谷忠義
NEC ブリッジフェスティバル担当：	島村京子
九州担当：	鳩山勝郎
九州支部担当：	勝部俊宏
委員会委員長	
企画委員会：	平田眞
人事委員会：	神代高弘
PABF*福岡実行委員会：	山口知也
競技委員会：	清水康裕
ルール委員会：	古田一雄
代表選抜委員会：	久富浩
センターサービス向上委員会：	田多井菊雄
公益法人移行委員会**（新設）：	中谷忠義

* 7 月に APBF 福岡実行委員会に改称

** 5 月 29 日時点では仮称、その後に正式決定

2. 新公益法人制度への対応

平成 20 年 12 月 1 日施行の公益法人制度 3 法に伴い、JCBL がどのように対応していくべきかを検討するため、平成 22 年 6 月、公益法人移行委員会を新たに設置した。同委員会で検討した結果、JCBL としては公益社団法人への移行を目指すべきとの結論に達し、8 月開催理事会でこの方針が承認された。この決定に伴い、同委員会では平成 23 年 6 月頃の申請を目指して準備作業を続けている。

3. 第 2 次 5 ヶ年計画

今年度は第 2 次 5 ヶ年計画の中間年である 3 年目にあたる。平成 22 年度末時点での実施状況については別紙の「第 2 次 5 ヶ年計画中間報告」を参照されたい。

以下、5 ヶ年計画の目標に沿って今年度の活動の概要を述べるが、詳細は各事業の報告を参照願いたい。

平成 22 年度の事業計画の重点項目に沿った各事業別の主な活動状況は次の通り。

(1) 連盟事業の改善

健全な財務体質の実現

第 2 次 5 ヶ年計画では損益分岐点以上の収支水準で事業を拡大できる財務体質の確立を目標としているが、今年度の経常増減額は、経常収益が 2 億 4,073 万円（前年度実績 2 億 4,773 万円、699 万円の減収）に対し、経常費用が 2 億 5,388 万円（同 2 億 3,147 円、2,242 万円の費用増）となり、全体で 1,315 万円のマイナスとなった。この主要因として、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の影響が挙げられる。震災直後に連盟主催競技会をひとつ中止したほか、3 月中は首都圏のブリッジセンターの競技会参加者数が一時的に激減したため、競技会収入が減少したこと、および、義援金としてチャリティ基金からの 300 万円に加えて一般会計から 700 万円を拠出したことも、収支に影響した。

ただし、健全な財務体質の実現に向けての取り組みは継続しており、この震災の影響を除けば、事業活動収支は概ね計画どおりに推移していた。収入面では、初心者向け競技会の開催・奨励・支援を継続的に実施して中長期的な観点から競技会参加者数の底上げに努めるとともに、プレイヤーおよび会員・会友を増やしていくための効果的な普及広報戦略を検討するため、認知度調査を含む、様々な調査を実施した。支出面では、事務局内でコスト削減努力を継続的に実施している。

事業の効率化・サービスの質の向上

事務局業務の抜本的な効率化に向け、担当業務および管理体制の見直し、IT システム化、臨時職員の活用、人材育成、採用計画等、様々な側面から検討を開始した。平成 22 年度は、業務管理体制の強化策として、照会サービス業務の内訳を記録する管理システムの導入を決定し、現在、その準備を進めている。

他方、サービス全般の質の向上策の一環として、ブリッジセンター／クラブが個人会員の徴収を代行した際は、一定の手数料を支払うこととした。また、連盟が発信する情報をさらに充実させていくことを目的に、未入会／新規入会者向けの mini ハンドブックを新たに発行するとともに、ウェブサイトの全面リニューアルに向けて利用者ニーズを把握するためのアンケート調査を実施した。

(2) 普及事業部

魅力ある競技会の開発

1) 初心者向け競技会の開催／奨励／支援

入門講習会で基礎を学んだ初心者プレイヤーに競技会の楽しさを知ってもらい、中長期的観点から会員数増加につなげることを目的に開始した初心者向け競技会の開催・支援・奨励を継続した。本年度は、「デビュタント杯（競技会未経験者限定）」を2回、「ビギナーズ杯△5MP／△20MP」を10回、計12回開催し、延べ378名の初心者プレイヤーが参加した。これらの大会当日に会員登録した新規入会者数は合計13名であった。

2) 競技会参加者への付加サービス企画の実施

新たな試みとして、ブリッジを覚えたての初心者プレイヤーに「ブリッジ旅行」の楽しさを体験してもらおうとともに、新人同士の交流を促すという狙いのもと、首都圏在住者対象の「ノービスへ出て九州へ行こう！」と、地方在住者対象の「全国の新人プレイヤーをNECBF初心者大会へ抽選で招待」の2種類の企画を実施した。どちらも、新人競技会参加者から応募を募り、抽選で選出した当選者をペアで所定の新人戦に招待するという企画である。これら企画は、初心者が競技会に参加する楽しさが増えると同時に、地方の活性化にもつながると、好評を博した。

戦略的な普及活動の展開

1) 地方大都市圏の活性化

本目標については、ターゲット地域に特定した関西神戸地区で、昨年度より常設会場の設立を視野に入れた地元関係者との検討作業に着手していたが合意に至らず、今年度前半は計画そのものが凍結状態となっていた。このため11月に計画全体の見直し作業を行い、関西におけるブリッジ活性化のための有力策は神戸地区でのブリッジセンター新設であることを再確認し、この方向で改めて実現可能性を検討していくこととなった。

地方競技会への参加者増加支援を通じての活性化策として、前年度より3年間の期間限定で実施している「全国ブリッジ巡ってBINGO!」を継続、異なる5地域の競技会に参加してビンゴを達成した会員数は、今年度末時点で延べ35名（実質27名）となった。

九州地区については、九州支部と福岡ブリッジプラザが、2年後に控えたAPBFコングレス福岡大会に向け、福岡地区におけるブリッジの普及と活性化のための活動を活発に展開した。九州支部では、地元協力組織である福岡委員会とも連携しながら、同大会を活用した普及広報活動の充実化と、大会成功を期するための支援事業の企画に取り組んだ。その具体的な成果として、平成23年4月に福岡大学で提供講座が開講されることになったほか、7月開催の山笠リジョナルに韓国から2チームを招待した。教育現場での普及活動支援やミニブリッジインストラクター養成講座の開催など、草の根レベルで愛好者を増やす取り組みにも引き続き注力した。他方、プラザでは、平成24年度を目途に収支を均衡させ、プラスに転じた段階でなるべく早く独立運営に移行するという中期目標に向け、今年度も従来の活動を充実させる方向で事業を実施した。今年度の収支は約225万円の赤字であったが、設立当初に比べ赤字幅は大幅に改善している（平成19年度が約700万円、同20年度が約820万円の赤字）。地元プレイヤーを中心とした組織的な運営体制の確立という重要課題は、残念ながら、本年度も実現には至らなかった。地元プレイヤー、九州支部との連携を一段と強化しながら、引き続きこの課題に取り組んでいく。

2) 普及システムの強化

全国各地の普及およびブリッジ指導活動に携わる会員・会友と普及事業部をつなぐネットワーク「普及ネット」は2年目を迎え、年度末時点で236名が登録を更新した。また、例年どおり、今年度も普及協力者の負担軽減策の一環として助成制度の見直しと充実化を実施した。助成策についてはかなりシステムが整備されてきたことから、今後の課題として、普及に関心を持ってくれる会員・会友をいかに増やしていくかに取り組んでいく。

国際事業の活性化

1) 2012APBF コングレス福岡大会広報活動

海外・国内双方からより多くの参加者を募るため、特設ウェブサイトの製作を開始、平成23年初夏頃の開設に向け、準備作業を進めている。また、大会振興策の一環として、大会ロゴマークをあしらったシールを制作、クリアファイルに貼って競技会用の賞品として提供したり、広報ツールに貼って利用したりするなど、大会PRを開始した。

2) マインドスポーツ普及活動の支援

マインドスポーツとしてのブリッジを社会に向けてアピールすることは、ブリッジの社会的認知度向上に大きく資するとの観点から、囲碁、チェス、シャンチー、チェッカー各団体とのタイアップ活動を継続している。なお、公益法人移行委員会では、マインドスポーツとしてのブリッジという位置づけを明確化するため、公益法人への移行に伴う定款改正案でコントラクトブリッジを「マインドスポーツ」と規定、平成23年5月開催の会員総会での承認を求める。

また、平成24年のAPBF コングレス福岡大会のサイドイベントとして、「マインドスポーツシンポジウム」を開催することを決定、準備作業を進めている。

ジュニア・ユース層への普及活動

ジュニア層：学齢の高いリピーター層の間ではミニブリッジからコントラクトブリッジに移行したいジュニアが増えてきている。このため、いくつかのジュニアイベントで試験的にオークション指導を開始、まだ数は少ないがジュニアくらぶ会員でデビュタント杯、ビギナーズ杯に参加するプレイヤーも誕生した。

ユース層：5年目を迎えた東京大学ブリッジ講座、2年目となる早稲田大学ブリッジ講座はともに順調に進行しており、平成23年4月からは、新たに福岡大学経済学部でブリッジ講座が開設されることになった。

(3) 競技会事業部

魅力ある競技会の開発

参加者数が伸び悩んでいた2日間の夏季シニアチームを、1日ずつの夏季シニアペア及び夏季シニアチームに分割開催し、参加者増をはかった。この結果、2日間での参加卓数は、2日間通しでの卓数と2日間での合計卓数という違いはあるものの、一昨年度の13卓、前年度の7卓から、31卓に増加した。

競技会の環境改善

センターサービス向上委員会が、ブリッジセンターおよび常設ブリッジクラブの実態調査に基づきまとめていた「常設コントラクトブリッジ会場運営のためのサービス・ガイドラ

イン」が完成、6月より施行を開始した。また、前年度に引き続き、AED購入の支援と意見書への対応を行った。

スコア入力端末の導入

競技会用スコア入力端末システム『ブリッジメイト』の導入のため、オランダの製作会社と協力して日本国内で使用するための認証手続きを行い、端末を810台購入した。うち300台を連盟で使用し、510台をクラブ／センター向けの販売用とした。平成22年秋より、試験運用を開始し、平成23年2月に開催した第16回NECブリッジフェスティバルより本格的に導入した。

競技会運営ソフト（JTOS）の保守およびバージョンアップ

本年度は、定期的な保守作業に加えて、ブリッジメイト導入に伴うJTOSの改造作業に着手した。作業は順調に進んでおり、平成23年夏に製品版をリリースする予定。

ディレクター育成

前年に続き、ナショナルディレクター養成プロジェクトが希望者に対して実習および試験を行い、1名のナショナルディレクターを推薦した。同じく、クラブディレクター育成のための講習会も引き続き開催した。

(4) 国際交流事業部及びその他の事業

ニュージーランドのハミルトン市で開催された第47回PABF選手権大会では、ウィメンズチームが優勝、シニアチームが準優勝した。ウィメンズチームの優勝は、昭和62年（1987年）以来2回目、23年ぶりの快挙であった。オープンチーム、ジュニアチーム（26歳未満）、ヤングスターチーム（21歳未満）は、いずれも4位であった。なお、同大会で開催された代表者会議で、パシフィックアジアブリッジ連合（PABF: Pacific Asia Bridge Federation）は、アジアパシフィックブリッジ連合（APBF: Asia Pacific Bridge Federation）に改称された。

第16回NEC杯は、海外16チームを含む48チームが参加し、海外から参加した8チームが決勝トーナメントへ進出、オランダとイギリスの混成チームNEDUKが初優勝した。

平成24年に福岡で開催される第7回APBFコンGRESの実行委員会は、役員改選に伴い、新委員長に山口知也副会長が就任、委員会を再編した。大会振興策として、平成23年度および24年度にファンゲームを、また、平成23年度の山笠リジョナルをAPBFコンGRESのプレ大会として位置づけて実施することに決定した。

普及事業部

事業の概況

【総収入 1,819 千円／予算 3,719 千円】

1. 参加料収入 (1,159 千円／予算 1,598 千円)
ブリッジを愉しむ会／ジュニア対象各イベント／普及事業部主催各初心者大会
2. 広告収入 (660 千円／予算 2,115 千円)
※ 別途、エンゼルプレイングカードより現物協賛 (118 万円相当)。
エンゼルプレイングカード(株) (夏季ウィメンズチーム／レッドリボン杯) 、日産自動車(株)
(ブルーリボン杯)

【総支出：69,392 千円／予算 78,270 千円】

普及部会 [8,454 千円／予算 8,453 千円]

1. 各種イベントへの参加、体験教室・講習会の開催と援助、人材の育成など
 - (1) 第 25 回国民文化祭おかやま 2010 生活文化・暮らしと味わい総合フェスティバル (支出 343 千円／予算 444 千円)
[会 期] 平成 22 年 11 月 6 日～7 日 (2 日間)
[会 場] 岡山県岡山市 岡山県総合グラウンド「桃太郎アリーナ」
[事業概要] 地元の同好会「楽友会」、地元会員 3 名、事務局からの 2 名に、近隣の広島 BC および香川 BC 有志の応援を得て、体験教室・デモンストレーションプレイを展開。会場内でも来場者の目に留りやすい場所であったため、準備した 10 テーブルは常に満席状態であった。延べ参加者数は 350 名以上。
 - ・ ミニブリッジ体験教室、コントラクトブリッジデモンストレーション、ブリッジ紹介パネル／世界のカードおよびブリッジが登場する小説などブリッジ関連資料の展示、地元同好会案内資料の配布、プロモーションビデオ放映
[広報活動]
 - ・ JCBL 公式ホームページでのリリース掲載
 - ・ 普及通信、JCBL 会報上で会員・会友へ岡山市在住の知人・親族への案内依頼
 - ・ 地元同好会、プレイヤーを通してのチラシ配布
 - ・ 山陽新聞 夕刊／朝刊 (8/27／8/28) ブリッジ同好会紹介記事掲載
 - ・ 「リビングおかやま」 (10/26) 国文祭ブリッジブース案内広告※ 国民文化祭実行委員会より、助成金 (計 914 千円) が支給された。
- (2) NEC ブリッジフェスティバル体験教室 (支出：821 千円／予算 702 千円、参加料収入：193 千円／予算 232 千円)
[会 期] 平成 23 年 2 月 11 日～12 日 (2 日間)
[会 場] パシフィコ横浜会議センター (神奈川県横浜市)
[イベント名] 「Let's Play マインドスポーツ！ ミニブリッジ体験教室 with 囲碁・チェス・チェッカー・シャンチー」

〔事業概要〕本事業は、①未認知者・未経験者にブリッジの楽しさを紹介する「体験教室」と、②入門講習修了者に競技の楽しさを体験してもらうことで一般競技会への参加者増へつなげることを目的とする「初心者大会」を二本柱としている。この二本柱を軸に、マインドスポーツ5種目を紹介することで、マインドスポーツ全体ならびにマインドスポーツとしてのブリッジの認知度向上をはかった。2日間の総来場者は約450名と、昨年を100名上回った。

初心者大会では、今回初の試みとして、首都圏以外の9地方から、参加条件を満たす9ペアを抽選で招待した。2日間開催した3種類の競技会（「デビュタント杯（競技会未経験者対象）」「ビギナーズ杯△5MP/△20MP」）の参加者は延べ193名を数えた。デビュタント杯には小学生2ペア、ビギナーズ杯2種には地方招待9ペアが参加した。このほか、来場者に楽しみながら全種目体験を促す「マインドスポーツ・シールラリー」を実施、達成者には「お楽しみ福引」として賞品を用意した。参加料収入は予想をやや下回ったが、その要因として、「会員」の参加者が予想より多かったこと（会員には割引料金を適用）と招待参加9ペアは参加料が無料であったことが挙げられる。

本イベントは、普及活動に関心のある会員に、普及事業部がこれまでの活動から得たノウハウを体験・研修してもらう場としても位置付けている。昨年同様、スタッフ延べ50名の中には、新人の希望参加が多数あった。

<プログラム> 総参加者：約450名

1) ミニブリッジ/囲碁/チェス/チェッカー(ドラフツ)/シャンチー(中国象棋) 体験教室

※ 協力団体：(財)日本棋院/日本チェス協会/日本チェッカー・ドラフツ協会/日本シャンチー協会

※ 囲碁は体験・対局コーナーのほか、プロ棋士による指導碁・多面打ちプログラムも実施。

2) コントラクトブリッジ初心者大会

「デビュタント杯」	参加者 62名 (含む：小学生4名) ※2日間
「ビギナーズ杯△5MP」	参加者 72名 ※2日間
「ビギナーズ杯△20MP」	参加者 59名 ※2日間

3) シールラリー/お楽しみ福引…447名が参加、うち51名が達成、お楽しみ福引に進んだ。

※ 福引賞品提供：ニチュー株式会社

<チャリティ古書市> ※ 併催イベント、新規事業

初の試みとして、会員から不要となったブリッジ書籍と未開封カードの寄付を募り、NECブリッジフェスティバル普及イベント期間中に「チャリティ古書市」を開催した。1冊(個)100円で販売し、収益金全額23,124円にチャリティ基金から26,876円を追加し、計50,000円を開発途上国の子どもたちに教育支援を行っているNGO「ルーム・トゥ・リード」へ寄付した。寄贈する側・必要とする側双方に好評だったことから、来年度以降も実施する予定。

〔広報活動〕初心者大会へのプレイヤー勧誘/普及イベントへの一般客勧誘のための、事前広報に注力した。

- ・ チラシ：一般用/ジュニア用/隣接ホテル内設置用/ビギナーズ杯参加促進用の4種を作成、それぞれ入門講習会講師、ブリッジ・インストラクター、各BCに送付。
- ・ ポスター：近隣BC用、会場近辺用(桜木町駅構内/パシフィコ横浜ポスターボックス)、会場内各フロアー用
- ・ DM葉書：東京・神奈川在住の△20MP会員160名に送付(1/19)
- ・ ウェブサイト：JCBLウェブ、NECウェブ、日本棋院ウェブ、日本チェス協会ウェブ

- 新聞・情報誌：朝日新聞東京本社版夕刊（2/2）、リビング横浜南・横浜東・田園都市各版（2/5）

〔 成果 〕

1) 初心者大会参加を契機として 13 名が JCBL に入会した。

- 地方からの招待者：7 名（当選者 4 名、パートナー 3 名）
- 当日入会：6 名（一般会友 3 名、家族会友 1 名、再入会 2 名）

2) 「ジュニアにもできるブリッジ」というアピールにつながった。

- ジュニア層の参加を促すため、当体験教室を対象に「ともだち紹介キャンペーン」を実施。高校生以下の参加者：延べ 41 名（うち、キャンペーンでの参加 2 名）。
- ジュニアくらぶ PR の場となり、1 名が当日入会した。
- デビュタント杯にジュニアくらぶ会員の小学生 4 名が初参加したことで、一般プレイヤーおよび体験教室の一般/ジュニア参加者に、「年齢にかかわらず楽しめるブリッジ」との印象を実感してもらうことができた。

3) 終了後の露出においても一般社会への「ブリッジ」PR につながった。

- 「ニューヨークタイムズ」ウェブ版
- 「ルーム・トゥ・リード」ウェブサイト/フェイスブック

(3) 「ブリッジを愉しむ会」（747 千円/予算 730 千円、参加料収入：480 千円/予算 560 千円）

〔 事業概要 〕 日頃ブリッジをする機会が少ないプレイヤーを対象に懇親会形式で 4 回実施、計 103 名が参加した。参加料 ¥5,000、飲食付

- 開催日/参加者数：①4/14（27 名）、②7/14（28 名）③10/13（23 名）、④1/12（25 名）

(4) ミニブリッジ指導員講習会（0 千円/予算 62 千円）

〔 事業概要 〕 導入ツールとしてミニブリッジを採用する指導者の育成を目的とする事業。指導法の浸透が進むとともに、指導ツールや指導者の情報交換手段が整備されてきたため、事業を縮小し、要請ベースでの開催を想定して予算化していたが、ニーズがなく、実施しなかった。なお、講習会に代わるものとして、国民文化祭、NEC ブリッジフェスティバルなどの普及イベントにおいて、個別指導や OJT を中心に指導者育成活動を行った。

(5) 体験教室・講習会への助成（2,454 千円/予算 2,440 千円）

〔 事業概要 〕 体験教室/入門講習会講師の負担を軽減し、開催回数の増加をはかるとともに、通常カルチャースクールでは支払い対象にならないアシスタント料を助成することで、良質なブリッジ習得環境の構築を支援した。

◆ ブリッジセンター、クラブおよび個人が開催する体験教室の助成

- 7 都道府県の教育現場や文化祭、地域イベント、国際交流イベント、老人福祉センター、同窓会、公民館、BC、海外クラブ、クルーズで、会員が開催した体験教室の講師/アシスタント料を助成した。
- 助成を行った都道府県と件数/回数、参加者数：東京都（16 件/26 回、260 名）、神奈川県（9 件/16 回、143 名）、千葉県（12 件/16 回、54 名）、栃木県（1 件/2 回、77 名）、福井県（3 件/12 回、112 名）、北海道（2 件/2 回、28 名）、長崎県（1 件/1 回、70 名）、海外（1 件/1 回、30 名）、クルーズ（1 件/4 回、12 名）

開催状況

平成 22 年度総数： 46 件、受講者 786 名、1 件当たり平均 17 名
 (平成 21 年度総数： 45 件、受講者 807 名、1 件当たり平均 18 名)
 (平成 20 年度総数： 45 件、受講者 864 名、1 件当たり平均 19 名)

◆ クラブおよび個人が開催する入門教室の助成

- 札幌、横須賀の福祉センター、宇都宮シルバー大学、福井市の生涯学習センターなどシニア世代対象の入門講習会や、栃木県の放課後スクール、ジャカルタ BC ほかで、会員が開催した入門講習会の講師／アシスタント料、クルーズのアシスタント料を助成した。
- 入門教室助成を行った都道府県と件数、参加者数：東京都（4件、45名）、神奈川県（2件、34名）、千葉県（1件、4名）、埼玉県（1件、16名）、栃木県（3件、54名）、福井県（1件、9名）、北海道（5件、34名）、宮城県（4件、52名）海外（2件、14名）、クルーズ（1件、50名）

開催状況

平成 22 年度総数： 24 講座、受講者 312 名、1 件当たり平均 13 名
（平成 21 年度総数： 18 講座、受講者 261 名、1 件当たり平均 15 名）
（平成 20 年度総数： 20 講座、受講者 216 名、1 件当たり平均 11 名）

◆ カルチャー講座アシスタント料の助成

- 東京都／埼玉県／千葉県／京都府のカルチャースクール 6 校で、会員が開催している入門講習会のアシスタント料を助成した。

開催状況

平成 22 年度総数： 22 講座、受講者 198 名、1 件当たり平均 9 名
（平成 21 年度総数： 23 講座、受講者 199 名、1 件当たり平均 9 名）
（平成 20 年度総数： 25 講座、受講者 209 名、1 件当たり平均 8 名）

(6) カルチャースクール講師料助成（126 千円／予算 500 千円）

〔事業概要〕ブリッジ普及にあたり特に重要であると普及事業部が判断する地域のカルチャースクール講師料を助成した。

- 対象カルチャーセンター：ヨークカルチャーセンター長野、NHK 文化センター京都、計 2 ヶ所

(7) 海外クラブへの支援（0 千円／予算 30 千円）

〔事業概要〕

- 各種アドバイス支援（電子メール／対面）および各種資料の提供：アブダビ日本人会ブリッジ同好会メンバー、上海ブリッジクラブ、ジャカルタ BC、アムステルダム、シンガポール、ニューデリーの日本人会ブリッジ部メンバーからの体験教室などの相談に細やかに対応し、各種資料を提供した。

2. 地方活性化支援活動（701 千円／予算 1,614 千円）

〔事業概要〕地方におけるブリッジ活性化／会員数増加のため、地方ブリッジの実態把握と支援活動に努めた。本年度は特に初級プレイヤーが楽しんで継続できる環境づくりを行うブリッジクラブを積極的に支援するとともに、新たな試みとして、地方在住／首都圏在住の初級プレイヤーの交流プログラムを企画・実施した。

(1) 地方ブリッジの活性化と会友増加のためにセンター・クラブが実施する普及・広報活動の支援

〔事業概要〕地方クラブ訪問調査・活動支援

- 仙台 BC の体験教室（4 月）／「仙台地球フェスタ体験教室」（9 月）の広報活動支援
- 金沢・北国新聞文化センター体験教室支援（6 月）
- 函館 YWCA に おいてブリッジプレゼンテーション実施（7 月）
函館市の非会員プレイヤーを発掘・指導し、YWCA 講座開講に至るまでを支援（4 月～）

- 大阪 BC 体験教室の広報支援として産経新聞に広告掲載（6月、9月）
- 「ヨークカルチャーセンター長野」講師交通費支援
- 浜松リジョナル開催時に「地方クラブ会議」（8月）を開催、地方のブリッジ関係者と直接情報共有・意見交換
- 長崎チェス&ブリッジクラブ主催「第3回長崎居留地まつりブリッジ大会新人戦」に優勝グラス寄贈、県外からの参加を募るための事前広報支援（9月）
- 「新潟ブリッジ同好会 20周年祭」出張支援（10月）
- 長崎すこやか長寿大学校でのブリッジ講座支援としてボード貸与、配付用カード提供
- 中日杯・石坂杯（10月）に併せて体験教室を開催するとともに、毎日新聞への広告掲載支援を含め、地元の全メディアへのブリッジ営業活動を行なった。

(2) 招待企画「ノービスに出て九州へ行こう！ー九州リジョナル併催新人戦」※ 新規事業

地方リジョナルの活性化と初心者競技会参加促進を目的とする新規企画。招待対象の競技会に平成 24 年に APBF 福岡大会を控える九州支部主催の九州リジョナル（平成 23 年 3 月）を選び、首都圏で開催されたノービスゲームの参加者から応募者を募り、抽選で 3 名をペアで招待した。招待内容は、交通費・宿泊費のバック料金と競技会参加料。

[実施期間] 平成 22 年 11 月～平成 23 年 3 月

応募期間：平成 22 年 11 月 6 日～平成 23 年 1 月 5 日 発表：1 月 12 日

応募者の参加回数を応募口数とする方式

[結果] ・応募総数 72 名（会員 43 名、一般 29 名）、応募口数 114 口

・当選者 3 名のうち会員は 2 名、非会員 1 名とそのパートナーの 2 名が入会

(3) 地方大都市圏の活性化（関西地区）

[事業概要] 第 2 次 5 ヶ年計画事業の一環として、ターゲット地域に特定した関西・神戸地区における常設会場の新設も視野に入れ、昨年度より、地元関係者との具体的な検討作業を進めていた。しかし、合意には至らず、その後、理事改選、各委員会再編成等の時期と重なったこともあり、実質的に計画そのものが凍結状態となっていた。11 月、プロジェクト再開のため、従来のワーキンググループに新メンバーを加えて企画委員会直属の「地方大都市圏活性化プロジェクトチーム」として担当部署を再編した。プロジェクト全体を見直した結果、関西地区におけるブリッジ活性化のための有力策は神戸地区にブリッジセンターを新設することであることを再確認、この方向で、JCBL の支援方法を含め、改めて実現の可能性を検討していくこととなった。これと並行して、大阪ブリッジセンターの新規プレイヤー増加のための側面支援など、関西地区全体としてのブリッジの裾野拡大にも引き続き注力した。

3. 新会員獲得活動（1,256 千円／予算 1,172 千円）

(1) 入会キャンペーン

[実施期間] 平成 22 年 1 月 1 日から 4 月 30 日 ※平成 18 年度の導入以来、5 年目の企画

[事業概要] 会報、JCBL ウェブサイト、各 BC へのポスター配布、会報記事などの方法でキャンペーン告知を行い、期間中の新入会者／再入会者／紹介者に QUO カードを進呈した。

[結果]

期 間	期間中入会者	うち紹介者あり	紹介者	前年度比
平成 22 年 1～4 月	225 名 (新 185 / 再 40)	163 名	93 名	△10 名 (+10 / +10)
(平成 21 年 1～4 月)	235 名 (新 189 / 再 46)	153 名	83 名	+27 名 (+2 / +2)
(平成 20 年 1～4 月)	208 名 (新 178 / 再 30)	151 名	81 名	△13 名 (△1 / △18)

(2) デビュタント杯／ビギナーズ杯の企画・開催

「デビュタント杯・ビギナーズ杯」は、新人プレイヤーに「初心者だけのフィールドでストレスなく楽しめる」競技環境と多数の賞品を提供することにより、競技会に参加することの楽しさを実際に体験してもらい、初心者のブリッジ競技への定着をはかることを目的とする普及事業部主催競技会である。多数の参加者が集まることからブリッジセンターも注目、NECブリッジフェスティバル以外でも、平成21年度は五反田ブリッジスタジオで、平成22年度は横浜BC、高田馬場BCの2ヶ所で、それぞれ開催が実現した。会場となるBCの「優待券」を副賞とし、ウィークリーゲームの参加者増やプレイヤーにとっての参加回数増、また当日入会を受け付けることで会員増につなげる機会としている。平成22年度には13名が大会当日に入会した。

[平成22年度開催回数]

デビュタント杯：計2回、ビギナーズ杯：△5MP計6回、△20MP計4回

※ いずれも1セッションの競技会

- デビュタント杯： ① NECブリッジフェスティバル：2回
- ビギナーズ杯： ① GWビギナーズ杯：△5MP-2回、△20MP-2回
- ② 秋のビギナーズ杯：△5MP-2回
- ③ NECブリッジフェスティバル：△5MP-2回、△20MP-2回

[平成22年度デビュタント杯・ビギナーズ杯概要]

1) 「ゴールデンウィーク・ビギナーズ杯」(5/2、於：横浜ブリッジセンター)

- △5と△20の2フライト。午前・午後にそれぞれ2回開催(クラス1)
- 参加者数：延べ92名(会員84名、一般8名)
 - △5 午前35名、午後32名、計67名(うち会員59名)
 - △20 午前12名、午後13名、計25名(すべて会員)

2) 「秋のビギナーズ杯」(9/19、於：高田馬場ブリッジセンター)

- △5の1フライト。午前と午後に開催(クラス1)
- 参加者数：延べ93名(会員71名、一般22名)
 - 午前41名、午後52名

3) NECブリッジフェスティバル「デビュタント杯」、「ビギナーズ杯」(2/11および2/12、於：パシフィコ横浜、いずれの 카테고리 も2日間で2回ずつ開催)

- デビュタント杯 競技会未経験者、(クラス1)
 - 参加者数：延べ62名(会員10名)
 - 11日40名(会員8名)、12日22名(会員2名)
- ビギナーズ杯 △5、△20の2フライト(クラス1)
 - △5参加者数：延べ72名(会員48名)
 - 11日40名(会員29名)、12日32名(会員19名)
 - △20参加者数：延べ59名(会員55名)
 - 11日35名(会員33名)、12日24名(会員22名)

(3) 招待企画「全国の新人プレイヤーをNECBF初心者大会へ抽選で招待」の実施 ※ 新規事業

[事業概要] 全国の新人プレイヤーに「旅とブリッジ」の魅力を知ってもらい、新人プレイヤー同士の交流やNECBFという国際大会の雰囲気を楽しんでもらうことで、ブリッジへの一層の定着をはかることを目的に実施した新規企画。全国を首都圏以外の9ブロックに分け、各ブロックの△20プレイヤーの応募者の中から抽選で1名をNECBFビギナーズ杯にペアで招待した。招待内容は、交通費・宿泊費のパック料金と初心者大会参加料。

[実施期間] 平成 22 年 10 月～平成 23 年 2 月

応募期間：11 月 1 日～12 月 20 日 発表：12 月 27 日

[ブロック] 北海道、東北、北陸、北関東・甲信越、東海、近畿、中国、四国、九州・沖縄

[結果] ・応募総数 89 名（会員 57 名、一般 32 名）

・当選者内訳：△5, 4 名、△20, 5 名、それぞれ地元パートナーとともに参加

・当選者のうち非会員 4 名が入会、パートナーを含めると計 7 名が入会

(4) その他の初心者大会支援

- ・ 「第 3 回長崎居留地まつりブリッジ大会」
(9/18、会場：長崎市旧香港上海銀行（重要文化財）、△50 対象)
優勝ペアへの賞品提供、県外からの参加者誘致のための広報支援を行った。
※ 当日の参加者：40 名（県外から 16 名）
- ・ 北海道リジョナル新人戦（7 月）...運営支援
- ・ 西日本新聞社杯新人戦（3 月）...勧誘支援

4. 会員サービス活動「全国ブリッジ巡って BINGO！」（140 千円／予算 300 千円）※3 年事業の 2 年目

全国各地で開催される競技会を 8 地域に分け、異なる 5 地域の競技会に参加すると「ビンゴ」を達成、インセンティブとして旅行券を獲得できるという、会員・会友を対象とする 3 年間の期間限定継続事業の 2 年目。現時点までのビンゴ達成者は延べ 35 名（実質 27 名）、8 地区制覇者 2 名。

[目的] ① 地方ブリッジの活性化

② 地方競技会参加にあたっての付加的な楽しみの提供

③ 会員同士の親睦、交流の活性化

[インセンティブ内容]

BINGO 賞：5,000 円の旅行券 ← 達成者全員

早期達成賞：10 名（1 位 10,000 円、2 位 9,000 円、3 位 8,000 円...10 位 1,000 円各旅行券）

8 地区制覇賞：平成 24 年 3 月末時点での制覇者全員で 10 万円を均等割りした旅行券

APBF 賞：平成 24 年 3 月末時点での全ビンゴ達成者から抽選で 1 名を APBF 福岡大会へ招待

5. 普及ネットプロジェクト（166 千円／予算 459 千円）

全国で普及活動に携わる会員・普及事業部間のネットワーク「普及ネット」2 年目の平成 22 年度は、「ブリッジ・インストラクター（略称：BI）」に 251 名が登録（随時登録可）。BI 同士／BI と普及事業部間の情報共有ツール「普及通信」では、新規に Q&A ページの公開を開始した。

[事業内容] ① 「ブリッジ・インストラクター」登録証の発行。希望者 154 名に郵送。

② インターネット上の情報共有サイト「普及通信」の更新（6 回）。

③ インターネット非利用者 92 名に、紙ベース「普及通信」を郵送。

ユース部会 [7,003 千円／予算 7,472 千円]

若年層へのブリッジ普及のため、本年度は以下の事業を行った。

1. 青少年対象の団体（機関）との提携（84 千円／予算 121 千円）

[目的] 教育関連機関（文部科学省・教育委員会・学校・PTA など）、行政機関（都道府県・市町村など）、および青少年対象イベントで体験教室を開催し、ブリッジの認知度・信頼度の向上をはかることで、授業・クラブ活動への採用につなげる。

[事業内容]

- ① 文部科学省「子ども霞ヶ関見学デー」（8月、於：文部科学省）ミニブリッジ体験コーナー出展
- ② 各地の教育現場で開催された文化祭やPTA行事、放課後の学童保育などでのブリッジ紹介活動を積極的に支援した。例：品川区立日野学園すまいるスクール、武蔵野第一中学校、茅ヶ崎市立赤羽根中学校、東京女子大学／津田塾大学同窓会、など。

2. 現役ユースへの支援

[目的] 現ユース・ジュニア会友を含め、青少年がブリッジを通して心身・勉学ともにバランスの取れた健全な成長をしていくことを最優先におきながら、若年層プレイヤーの育成と底辺拡大を目指す。大学や高校のクラブへの支援、および学生リーグへの支援・助成を通じて、現役ユースの負担軽減と若年層プレイヤーの新規開拓・定着をはかる。

(1) 大学クラブ新入部員勧誘活動助成（0円／予算 165 千円）

4月～6月にかけて行なわれた学生リーグ加盟各大学の新人勧誘活動にあたり、学生からの要望に応え、必要な印刷物（チラシ、ポスター、など）の大量印刷、用紙の提供など、現物支給の形で支援した。

[平成 22 年度各大学ブリッジクラブ・同好会部員数] ※（ ）内は平成 22 年度新入部員数

東北大学 14 名（5 名）、東京大学 12 名（5 名）、学習院大学 3 名（1 名）、早稲田大学 8 名（4 名）、慶應義塾大学 5 名（1 名）、千葉大学 5 名（5 名）、京都大学 7 名（4 名）、大阪大学 10 名（2 名） 計 8 大学 64 名（新人 27 名）

- このほかに、名古屋大学、北海学園大学（札幌）、電気通信大学に正規クラブとなっていないがブリッジをプレイする学生（留学生を含む）のグループがあり、横浜国立大学にも個人プレイヤーがいる。いずれも、学生リーグや JCBL ユース部会と連絡をとりあう体制はできている。
- 電気通信大学非電源ゲーム研究会（ブリッジプレイヤー 15 名）、開成中学コントラクトブリッジクラブにヘルマン氏図書基金より入門書籍を寄贈した。
- 早稲田大学ブリッジ部、慶應義塾大学ブリッジ部が JCBL 公認クラブとして承認された。
- 同志社大学にブリッジ同好会が設立された。
- 大学以外では、開成中学コントラクトブリッジクラブ（部員 20 名）が活発に活動中。
- 福岡市の板付中学の国際交流部の活動にミニブリッジが採用された。

(2) 学生合宿（学生リーグ主催）支援活動（271 千円／予算 398 千円）

[事業概要] 学生リーグ夏季合宿・学生選手権・春季合宿に参加したブリッジ 1 年目の学生 31 名の宿泊費、ならびに遠隔地から参加した学生の交通費を助成した。

1) 夏季学生・ユース合同合宿支援

期間：平成 22 年 9 月 5 日～9 日 会場：東京都江東区スポーツ文化会館

参加者：大学生 43 名（うち、ブリッジ 1 年目の学生 15 名）、大学院生 1 名

[内 訳] 東京大学（10 名）、学習院大学（3 名）、早稲田大学（6 名）、慶應義塾大学（4 名）、東北大学（9 名）、京都大学（3 名）、大阪大学（4 名）、名古屋大学（2 名）、電気通信大学（1 名）、横浜国立大学（1 名）、千葉大学（1 名）

• 学生選手権の結果（10 チーム）：

1 位 大阪大学、2 位 東京大学 B、3-4 位 東京大学 A、学習院大学

2) 春季学生・ユース合同合宿支援

期間：平成 23 年 3 月 8 日～12 日

会場：東京都渋谷区国立オリンピック記念青少年総合センター

参加者：大学生 37 名（うち、ブリッジ 1 年目の学生 16 名）

[内 訳] 東京大学（7 名）、学習院大学（2 名）、早稲田大学（5 名）、慶應義塾大学（4 名）、東北大学（7 名）、京都大学（3 名）、大阪大学（3 名）、名古屋大学（4 名）、横浜国立大学（1 名）、千葉大学（1 名）

• 学生選手権の結果（8 チーム）：

1 位 大阪大学、2 位 東京大学 B、3-4 位 東京大学 A、学習院大学

3. ユース・スクール代表選抜・強化プログラム・国際試合への派遣

[目 的] 意欲ある若年層のための強化プログラムなどによる技術向上支援、および日本代表としての海外遠征機会の提供・助成を行い、若年層がブリッジを継続できる環境を整備する。

(1) 第 47 回 PABF 選手権大会への派遣（2,305 千円／予算 2,423 千円）

[事業概要] 会期：平成 22 年 5 月 22 日～30 日 開催地：ニュージーランド、ハミルトン

① ジュニアチーム（U26）6 名、スクールチーム（U21）6 名、NPC1 名を派遣

• NPC：山後秀幸

• ジュニアチーム（U26）：三浦裕明、貴戸祥郎、後藤田俊輔、半田康一、松田崇志、會田祥

• スクールチーム（U21）：北村孝之、杉本大輔、村上草平、渡貫智行、木山智裕、河野洋伸

② 参加選手・NPC の航空運賃、宿泊費、参加料、海外保険料、ユニフォーム代を助成

③ ユース部会が定める「グレード 1」の国際試合であることから、各選手は@¥20,000 を自己負担した。

[結 果]

• ジュニアチーム：参加 7 チーム中 4 位

• スクールチーム：4 チーム中 4 位

• オープンペア戦：三浦－貴戸ペア（17 位/116 ペア）と渡貫－河野ペア（25 位/116 ペア）が予選通過し、本戦では三浦－貴戸ペアが 26 ペア中 19 位、渡貫－河野ペアが 25 位で終了。

• コンソレーション：45 ペア中、後藤田－半田ペア 6 位、北村－山後ペア 7 位

(2) 世界大学選手権への派遣（824 千円／予算 989 千円）

[事業概要] 会期：平成 22 年 8 月 2 日～9 日 開催地：台湾、高雄 参加国・地域：10（14 チーム）

- ① 国際大学スポーツ連盟（FISU）主催、日本では JOC が参加申請などを担当する同大会に、NPC と代表チーム 6 名を派遣

- NPC：山後秀幸
- 選手：伊井康朗－貴戸祥郎、後藤田俊輔－半田康一、松田崇志－會田祥

- ② 参加選手の航空運賃、宿泊費、参加料、海外保険料、ユニフォーム代を助成

- ③ ユース部会が定める「グレード 2」の国際試合であることから、各選手は@¥30,000 を自己負担した。

[結果] 14 チーム中 10 位（優勝 ポーランド、準優勝 フランス、3 位 イスラエル）

- (3) 世界ユースチーム選手権への派遣（1,459 千円／予算 1,344 千円）

[事業概要] 会期：平成 22 年 10 月 10 日～16 日 開催地：アメリカ、フィラデルフィア

- ① 平成 21 年の PABF マカオ大会で出場権を獲得していたジュニア部門に NPC と代表チーム 6 名を派遣

- NPC：山後秀幸
- ジュニアチーム（U26）：横井大樹－三浦裕明、中山尚純－後藤田俊輔、伊井康朗－貴戸祥郎

- ② 参加選手の航空運賃、宿泊費、参加料、海外保険料、ユニフォーム代を助成

- ③ ユース部会が定める「グレード 1」の国際試合であることから、各選手は@¥20,000 を自己負担した。

※ 本大会への上場権を獲得した平成 21 年の PABF 大会代表メンバーの横井選手、三浦選手、貴戸選手の自己負担金は免除措置をとった。

[結果]

- 世界ユースチーム選手権（10/10～13）：17 チーム中 13 位
- ジュニアインディビジュアル戦（10/14、15）：横井選手、三浦選手が決勝に進出。24 プレイヤー中、横井選手 19 位、三浦選手 24 位
- ローゼンブルム杯（10/5～8）：ジャパンユースとしてセクション P に参加。9 チーム中 6 位
- スイスプレート（10/8）：横井－三浦ペアとオーストラリアユースペアでトランスナショナルチームを組んで参加、46 チーム中 11 位、中山－後藤田、伊井－貴戸のジャパンユースは 21－25 位。

- (4) ユース強化プログラム（1,190 千円／予算 1,525 千円）

特筆事項：集中講習会は学生の休み期間中の開催に留意した。また遠隔地からの参加者には、仲間の自宅や関係者関連で廉価で宿泊可能な場所を紹介するなど、学生自身の負担金の軽減に努めた。

[事業概要] 平成 22 年度の代表選手および平成 23 年度代表候補登録者を対象に、技術力強化と選抜を目的に、実戦練習会参加費の助成、強化練習会、選考試合を開催した。遠隔地からの参加者には、交通費・宿泊費の助成を行った。

- ① 集中講習会（年末特別講習会／強化対象試合後の特別講習会）の実施

- ② 強化対象試合（柳谷杯、横浜インビテーションショナル、朝日新聞社杯、NEC 杯、木村六郎杯、萩原杯、兵庫県知事杯）参加料、遠方からの参加者の交通費・宿泊費助成

- ③ 第1次代表選考会、第2次代表選考会の実施
- ④ 講師料（各競技会前後、直前講習会）、2次選考会オペレーター料、など
- (5) ユース／ジュニア会友の国際試合への参加助成（631千円／予算100千円）

若年層プレイヤーに、世界のブリッジに触れ、国際経験を積む機会を提供することを目的とする助成事業。本年度は、オランダブリッジ連盟の招待により「ホワイトハウス杯」に1チーム4名を派遣した。計画外の招待であったが、理事会承認を得て実施した。

[事業概要] オランダブリッジ連盟主催「ホワイトハウス杯」への代表チーム派遣

会期：平成23年3月20日～25日 開催地：オランダ・アムステルダム 参加チーム数：24

派遣チーム：横井大樹－三浦裕明、小池紀彰－貴戸祥郎

※ 助成は交通費（航空運賃）のみで、宿泊費は自己負担。

[結果]

- 本戦：24チーム中14位
- B・a・M+VP チーム戦（初日）：優勝

※ その他、「世界BBO選手権」（平成23年1月～）に、日本より1チームが参加。

チーム：今井智士、中山尚純、後藤田俊輔、小池紀彰、貴戸祥郎、木山智裕

32チームによるKO戦。初戦でUSAチームに敗退。

- (6) ユースキャンプの開催（241千円／予算408千円） ※新規事業

[事業概要] 会期：平成22年9月16日～18日 開催地：高尾の森わくわくビレッジ

全国の学生を対象にした2泊3日のJCBL主催キャンプ。各大学の新1年生や高校生と現役学生プレイヤー同士の交流、技術向上、および代表候補への登録者数増加を目的とした新規事業。

- 高校生以上の学生が対象。ブリッジを知らない学生（特に1・2年生）の参加可。
- テストケースとして始め、会を重ねながらプログラムの充実をはかっていく。
- 講師・スタッフ宿泊費・交通費を支給
- 遠隔地から参加の学生への交通費を助成
- 学生からは参加料¥5,000を徴収

[結果] 参加者13名（うち、1・2年生10名）

東北大学4名、慶應義塾大学3名、東京大学4名、早稲田大学2名、（+講師3名）

教育部会 [1,647千円／予算2,065千円]

教育現場に直結する下記事業を実施した。

1. 東京大学全学体験ゼミナール「考える力を養う／コントラクトブリッジ」（506千円／予算680千円）

※ 年間に2期実施。各期全13回授業／取得単位数2単位

平成18年の開講以来5年目となる同ゼミナールの平成22年度夏学期（第9期）、冬学期（第10期）の開催を支援した。各期とも13回授業／取得単位数2単位。開講以来、計155名が単位を取得している。同大学でのブリッジゼミナールは、同大ブリッジ部の活性化、学内での知名度向上の

みならず、全国レベルでのブリッジの社会的信用度の向上にも寄与しており、また早稲田大学（平成 21 年度）および福岡大学（平成 23 年度）でのブリッジ講座開講につながるなど、教育現場における着実なブリッジ拡大の礎となっている。

- 夏学期（4 月～7 月）： 単位取得者 11 名
- 冬学期（10 月～1 月）： 単位取得者 2 名

注）冬学期の受講生が少なかったのは、休日の関係でブリッジの履修ガイダンス日には既にほとんどの学生が他講座の登録を済ませていたという想定外の事態が起こったことによる。このため、再発防止策を講じ、平成 23 年度以降の履修登録者数は元に戻る見通しである。

〔 事業内容 〕

- ① 準講師格アシスタント（2 名）、フロッターの派遣
- ② 授業準備（教材コピー、発送作業、ボード組み込みなど）支援
- ③ 四谷 BC で実施する最終講義（競技会、BC 見学）開催支援
- ④ 受講生への会報配布支援
- ⑤ 教材／その他授業に必要な改良作業に対する支援

2. 早稲田大学「コントラクトブリッジで学ぶ数理科学入門～論理的思考力を身につけよう」 （1,132 千円／予算 1,200 千円） ※ 前期／後期各 15 回、取得単位数 2 単位

早稲田大学の「ゲームの科学研究所」を母体に、ブリッジ指導法の研究を目的として平成 20 年秋に実施したテスト講座を経て、翌 21 年 4 月に同大学メディアネットワークセンター提携講座として正式開講した講座の 2 年目授業を支援した。

本講座は、ミニブリッジからスタートしてコントラクトブリッジの基礎までを教える独自の指導法を採用。また、オープン科目としての位置付けで、学習院大学、学習院女子大学、日本女子大学、立教大学、東京家政大学、および提携高校の生徒の履修が可能であることから、他の教育現場へ直接アピールできることが特徴である。本年度は早稲田学院高校 3 年生が 1 名履修した。毎回の授業には同大ブリッジ部員がフロッターとして参加、受講生とブリッジ部の距離感が近く、履修後にブリッジ部に入部して継続する学生が多い。2 年間で 51 名が単位を取得し、このうち 37 名がブリッジを継続している。

- 前期（4 月～7 月）： 履修登録者 20 名、単位取得者 13 名
- 後期（10 月～1 月）： 履修登録者 24 名、単位取得者 10 名

〔 事業内容 〕

- ① 講師料／アシスタント料／交通費支援
- ② 授業準備費／用具の支援
- ③ 教材印刷／コピー費／宅急便など、必要経費の支援
- ④ 教室使用料

3. 学校ブリッジ教育拡大活動（8 千円／予算 145 千円）

- 福岡大学経済学部特別講座「教育とイベント」（5/18）で小山九州支部長が講演した際、①橋之介カード、②ブリッジ紹介総合パンフレット、③入門ソフト CDR を入れた PR キットを用

- 九州支部の福岡大学提供講座開設に向けての準備活動を支援、平成 23 年 4 月の開講が決定した。

4. 学校担当ブリッジ講師養成講座の開催（0 円／予算 40 千円）※ 本年度は実施せず

養成講座としての実施はなかったが、教育現場での講師を検討中の会員の個別相談や資料提供などの活動をケースバイケースで実施した。

ジュニア部会 [支出：1,659 千円／予算 3,225 千円]

ジュニア層を対象に下記活動を行なった。

1. ジュニアくらぶ活動（510 千円／予算 1,296 千円）

[目的] 「ジュニアくらぶ」システムを活用しながら、ジュニア層およびその保護者に対するブリッジの認知度・イメージ向上、ジュニアプレイヤーの数的・地理的基盤の拡大をはかるとともに長期的にブリッジを継続してもらえるような将来のブリッジ界を担うジュニアプレイヤーの育成を目指す。

[事業概要]

- ① ジュニア層向け普及広報活動全般の企画・運営
- ② ジュニアくらぶイベントの企画・運営（ジュニアサロン、橋之介道場、ジュニアキャンプなど）
これまで参加者はジュニア限定だったが、家族でブリッジを楽しむ機会や子どもが大人のプレイヤーと対戦する機会を提供する目的で、今年 1 月より、多くのイベントを大人も参加できるよう変更した。
- ③ ジュニアくらぶ活動の運営・管理（会員データ管理、スタンプラリー運営・管理・景品購入、スタッフ管理、など）
- ④ ジュニア向け広報活動
ジュニアくらぶ通信の編集・発行（年 4 回）
会報ジュニアコーナー、JCBL ウェブサイト・ジュニアページの編集・記事作成・掲出
チラシ／ポスター製作、会員向け発送
登録者向けメール配信、など
- ⑤ ジュニア向け指導システム・汎用教材の企画・開発
ジュニアへの普及協力者／指導者の開拓

[活動状況]

- ジュニアくらぶ会員数（平成 23 年 3 月末日時点）：233 名（うち、JCBL ジュニア会友：81 名）
- 本年度イベント開催数：34 回
- 年間延べ参加者数：302 名（小学生 199 名、中高生 63 名、保護者 40 名）

2. ジュニアサロンの開催（195 千円／予算 252 千円）

[目的] ジュニア層がミニブリッジを体験、練習できる機会を参加料無料で提供し、初心者たちがミニブリッジに親しみ、楽しみながら継続できる環境の整備を目指す。また保護者の参加も促し、家族で遊びながらブリッジを継続していける環境作りも目指す。

[事業概要] 延べ開催回数 : 14 回、延べ参加者数 : 112 名

初めてのジュニアからヘビーリピーターまで参加できる無料イベントとして定着、本年度から京葉・横浜 BC のほか、四谷 BC でもスタートした。春・夏休みなどの平日に年 2~3 回開催している八千代台会場のサロンは、スポーツ少年を中心に賑わっている。他方、京葉 BC 会場では新規参加者が少ないが、今後、同 BC の協力を得て開催数を増やし、PR 活動も強化して地元ジュニアの獲得に努めていく。

横浜 BC (5 回、37 名)、京葉 BC (4 回、14 名)、四谷 BC (3 回、27 名)、
八千代台 (2 回、34 名)

3. 橋之介道場シリーズの開催 (421 千円/予算 655 千円)

[事業概要] 年齢および経験別に、四谷・横浜地区で、原則月 1 回、日曜日の午前と午後に 3 つの異なるプログラムを開催。今年度より、京葉 BC でもジュニアサロンと併催する形でミニ道場を開始した。

① 橋之介ひろば/プレ道場 (併催)

12 回開催 (四谷 BC7 回/横浜 BC5 回)、延べ参加者 58 名 参加料 : @ ¥200

② 橋之介ミニ道場

12 回開催 (四谷 BC6 回、横浜 BC3 回、京葉 BC3 回)、延べ参加者 37 名 参加料 : @ ¥300

③ スペシャル大会

2 回開催 (横浜 BC2 回)、延べ参加者 37 名 参加料 @ ¥500/1 名

4. 「夏休みジュニアキャンプ 2010」の開催 (449 千円/予算 604 千円)

親子キャンプ 2007、ジュニアキャンプ 2008/2009 に引き続き、4 度目の夏休みジュニアキャンプを企画・開催した。

[目的]

- ジュニア同士の交流を促すとともに、ブリッジの楽しさを深く知ってもらい、ジュニア層の定着をはかる。
- ジュニアへのブリッジ普及に関心のあるプレイヤーやスポンサーの見学、研修の場として活用し、ジュニア指導者の育成に役立てる。
- 保護者ボランティアスタッフや学生アシスタント、ジュニアくらぶインストラクター間の交流、意見交換をはかる。

[事業概要]

期間 : 平成 22 年 7 月 30 日~31 日 (1 泊 2 日) 場所 : 東京都八王子市高尾の森わくわくビレッジ
ジュニア参加者 : 18 名 (小 2~小 3 : 3 名、小 4~小 6 : 13 名、中学生 : 2 名、男子 9 名/女子 9 名)
参加料 : 11,000 円

スタッフ : 講師 2 名、アシスタント 3 名、ボランティアスタッフ 3 名、見学 12 名、事務局から 1 名
今年度は、年齢の高いリピーター層を対象に、コントラクトブリッジのオークション体験セッションを試験的に実施した。

5. ミニブリッジ大会「ハシノスケ杯」の開催 (0 千円/予算 60 千円)

今年度は、会場を八千代台に移して「八千代台スペシャル大会」と銘打っての開催を3月31日に予定していたが、東日本大震災発生の影響によりジュニアイベントはすべて延期と決定し、年度内実施は見送った。

6. 「第3回ジュニアミニブリッジチーム選手権試合」の開催（56千円／予算95千円）

【目的】将来、全国から予選を勝ち抜いたチームが競う「全日本ジュニアミニブリッジチーム選手権」に発展させることを目指している競技会。出場を目指すこと、参加することによってジュニア層によりブリッジを深く知ろうという気持ちを起こさせ、プレイヤーであることを誇らしく思うような格式の高いジュニア向け競技会として定着をはかる。なお、昨年度からサイドゲームを併催しているが、試合名称を「マクブリッジ杯」としたうえで、本年度も実施した。

【事業概要】

開催：8月15日 10:00～17:00 会場：四谷BC 地下1階 参加料：¥4,000／チーム

内容：ミニブリッジチーム戦、予選通過2チームで決勝戦

結果：3チーム12名（小学生：8名、中学生：4名）が参加

優勝...「お月見」（中2、小5、小4×2）

賞品... 賞状と盾

「第1回マクブリッジ杯」...7ペア参加（小学生4名、中高生5名、保護者1名）

7. 「集中講座」の開催（0千円／予算263千円）

新しい試みとして、高学年のヘビーリピーターを対象にレッスンタイプのイベントを新設。ブリッジのオークションや技術を集中的に学ぶ機会を提供し、子どもたちのブリッジに対する知的好奇心の持続を後押しするとともに、技術向上とコントラクトブリッジへの移行を促すことを目的としている。平成23年3月に第1回目の開催を予定していたが、直前に発生した東日本大震災発生の影響により延期を決定した。

8. その他のジュニア関連イベントへの協力 ※ 経費はジュニア部会勘定外

- 横浜ミニベイブリッジフェスティバル杯（5月、横浜）：企画・PR支援、ディレクター派遣、賞品提供
- 関西ジュニア・ペア碁大会（8月、大阪）：スタッフ派遣、カード・グッズ提供
- 日本棋院中部総本部夏休みジュニアイベント（8月、名古屋）：スタッフ派遣、賞品提供
- めぐみ野サロン（八王子）：講師助成
- 文部科学省夏休みイベント「震が関こども見学デー」（8月、東京）：スタッフ派遣、カード提供

広報部 [20,225千円／予算22,802千円]

ブリッジの社会的認知度を上げ、普及活動に資するため、以下の事業を行なった。なお、広報活動には速やかな意思決定と対応が求められるため、本年度より、広報事業については部会を組織せず、事務局内の広報部として事業を行っていくこととした。

1. ブリッジ普及広報宣伝活動（7,732千円／10,049千円）

第2次5ヶ年計画の「戦略的な普及活動の推進」の一環として、新広報戦略を策定するための調査活動と、費用対効果の高い広報・広告アウトプット活動を展開した。

[事業内容]

(1) 中・長期広報戦略 (PR 広報戦略/広告戦略) 策定のため、下記調査を実施

1) JCBL ウェブアンケート調査 (実施期間:平成 22 年 7 月 7 日~8 月 31 日)

会員サービスの拡充およびブリッジに関心をもって JCBL ウェブサイトにアクセスしてきた一般閲覧者をさらに引き込むための施策を探ることを目的として、利用状況、印象、ニーズに関するアンケート調査を JCBL ウェブ上で行った。

※ 最終回答数:会員 199 通、一般 50 通

2) ブリッジ認知度およびコントラクトブリッジに関するアンケート調査 (実施期間:平成 11 月 15 日~11 月 18 日)

ブリッジの認知度と広報活動の有効ターゲット層の特定を目的に、ネット調査会社マクロミル社に委託して、同社のモニター会員 20,000 名を対象とするスクリーニング調査、および、その中から抽出した 1,500 名を対象とする本調査の 2 段階で調査を実施した。現在、分析作業を継続中。

※ 平成 24 年の APBF コングレス福岡大会後に再度認知度調査を実施し、広報活動の成果を測定予定。

(2) 対メディア広報活動の実施

- プレスリリース作成/配信/ウェブ掲出:9 本

- メディア露出回数:新聞・雑誌など、計 53 回、総発行部数:約 3,300 万部~
(全国紙 20 回、全国紙地方版・地方紙 35 回、夕刊紙・雑誌・その他 5 回)

注:「ブリッジ」をキーワードに設定し、クリッピングサービス会社が集めた記事の出現回数

- テレビ/ラジオ/インターネットメディア露出回数

テレビ 3 回 (函館 2 回、大阪 1 回)、ラジオ 2 回 (函館 2 回)、インターネットメディア (フェイスペインク 2 回、ウェブサイト-NEC、ルーム・トゥ・リード、新現役ネット、鎌倉ロザリウム、茅ヶ崎ロータリークラブ、エンゼルプレイングカード(株)、(株)ニチュー、日本棋院、その他各新聞電子版など) 注:JCBL 調べ

(3) マインドスポーツ各団体とのタイアップイベント参加、広報活動

- 囲碁界とのタイアップ活動:5 回目となる「関西ジュニア・ペア碁大会」でのミニブリッジ体験コーナー出展 (7/31) は関西棋院および日本ペア碁協会から、2 回目の「夏休み、プロと遊ぼう!ジュニア囲碁まつり」(8/6) は日本棋院中部総本部から、毎回招待を受けて参加している。回を重ねるたびに、ジュニア棋士およびその保護者、囲碁関係者、各イベントの他の協賛企業・団体に対し、マインドスポーツ仲間としてのブリッジの存在が自然な形で浸透していていることは、大きな広報効果へとつながっている。
- チェス界とのタイアップ活動:本年度も、例年どおり、長崎チェス&ブリッジクラブ主催イベントへの参加・協力を実施。同クラブの主催で、9 月に「第 3 回長崎居留地まつりブリッジ大会新人戦」が開催され、また、10 月には海外親善訪問「第 2 弾!!! Exciting ブリッジの旅!!! ~韓国(ソウル)のブリッジクラブとの交流!!!~」が実施された。さらに、チェスプレイヤーである同クラブ牛嶋代表が講師で「長崎すこやか長寿大学校ブリッジ講座」も開催され、参加者数は 100 名にのぼった。同クラブの積極的な活動を通じて、チェス界内部、および、長崎県、長崎市など地元各所にブリッジの名前が着実に浸透していき、その PR 効果は非常に大きいと考えられる。

(4) マスメディアへの広告掲載

広告掲載はこれまでイベント告知が主体であったが、本年度は、「ブリッジ」の名前とイメージを、広く、強く植え付けて、認知度向上をはかることを主眼に置き、一般雑誌媒体・特定業界

機関紙への広告掲載を集中的に行った。このうち、「日経おとなの OFF」誌に初掲した 2 枚シリーズのイメージ広告は、会員・会友の間で好評を得たほか、掲載誌を見た他の媒体からも特価での掲載打診が寄せられるきっかけとなった。広告掲載の選択肢が広がったことは、費用対効果の面からも大きなプラスとなった。さらに、この 2 枚シリーズ広告は、平成 22 年度日経 B P 広告賞優秀ライフスタイルデザイン賞を受賞した。大企業の広告に引けをとらない高評価を得たことは、ブリッジのイメージアップ、認知度向上につながるものと期待される。

〔事業内容〕

1) 全国を対象にしたブリッジ PR 広告：ブリッジイメージ／総合 PR 計 15 回

- ・月刊誌「日経おとなの OFF」8月号、9月号、10月号、12月号、2月号、3月号
- ・月刊誌「和楽」11月号
- ・機内誌「SKYMARK」（スカイマーク航空）11月号、12月号、1月号
- ・会員用機関誌「はれ予報」（信金 VISA カード）9月号、10月号、11月号、12月号
- ・会員用機関誌「ないすらいふ」中高年齢者雇用福祉協会

2) 特定地域を対象にした PR 広告：体験教室開催告知 計 9 回

- ・新聞「産経新聞」本紙朝刊（大阪市内版）6月...大阪 BC 体験教室案内
- ・新聞「産経新聞」本紙朝刊（大阪市内版）9月...大阪 BC 体験教室案内
- ・新聞「朝日新聞」東京本社版夕刊 2月...NEC ブリッジフェスティバル普及イベント案内
- ・新聞「毎日新聞」愛知県版 10月...石坂杯／中日杯体験教室案内
- ・情報誌「リビング名古屋中央」10月...石坂杯／中日杯体験教室案内
- ・情報誌「リビングおかやま」10月...「国民文化祭おかやま」体験教室案内
- ・情報誌「リビング横浜南版」1月...NEC ブリッジフェスティバル普及イベント案内
- ・情報誌「リビング横浜東版」1月...NEC ブリッジフェスティバル普及イベント案内
- ・情報誌「リビング横浜田園都市版」1月...NEC ブリッジフェスティバル普及イベント案内

(5) 「全国の図書館へのブリッジ図書寄贈プロジェクト」第 2 弾の実施（50 ヶ所予定）

〔事業内容〕平成 21 年度に開始したブリッジ図書寄贈プロジェクトの 2 年目企画。本年度は、地方大都市圏活性化の観点から、関西地区および平成 24 年に APBF コンgress 大会が開催される九州地区を中心に 47 の図書館を選び、寄贈申込状を送付、回答のあった 13 館の 49 分室へ「ブリッジ入門」（水谷宮三著）を寄贈した。

(6) その他、広報のための活動

- ・メディアナイト開催：企画広告宣伝組合、フブキ
- ・ウォールストリートジャーナルブリッジ記事翻訳
- ・クリッピングサービス利用
- ・ブリッジ資料セット製作
- ・広告掲載誌の一括購入、など

2. ブリッジに関する出版物の刊行（10,086 千円／予算 9,857 千円）

定款第 5 条（6）に定められた「コントラクトブリッジに関する出版物の発行」に基づき、次の書籍を出版する。可能なものは事務局内で製作し、コスト減をはかっている。

(1) 会報「JCBL ブリテン」

年6回奇数月1日発行、各7,300部

(2) 「JCBL HANDBOOK」

5月1日 7,500部発行

(3) 「miniハンドブック」初心者向け ※ 新規事業—特別経費発生せず。

7月1日 新入会者へのサービスとして、「JCBL HANDBOOK」の要点をコンパクトにまとめた小冊子を事務局内で編集・印刷して発行。必要に応じてその都度印刷する方式。

3. 広報ツールの製作 (879千円/予算879千円)

ブリッジの普及・啓蒙活動の効果を高めるため多様に展開可能な広報ツールを企画製作し、質・量ともに充実した広報ツールが、一般社会、全国のメディア、普及現場に行きわたるようにする。

[事業内容]

- (1) 初心者大会の賞品ほか、会員サービスとして活用可能な廉価なグッズの製作・購入
- (2) ブリッジ紹介DVDのコピー版製作(100枚)
- (3) オリジナルプレスキットカバー製作/印刷(2,000部)
- (4) オリジナル年賀状の製作と印刷(550枚)
- (5) 広報パネルの製作...ジュニアクラブパネル(4)/ブリッジイメージ広告2種のパネル化(4)
- (6) ポスター製作...ジュニアクラブポスター(2)/イメージ広告ポスター2種(10)
- (7) ブリッジ総合パンフレットの改訂/印刷(2,000部)
- (8) 「Let's Play Bridge」ミニパンフレット増刷(6,000部)
- (9) 虎ノ門実業会館ビル「ブリッジ看板」製作
- (10) ブリッジ携帯ストラップ購入(45本)
- (11) ブリッジプロモーションビデオのDVD化/プリント製作

4. ウェブサイトの運営 (1,872千円/予算2,017千円)

本年度も、月次定例更新のほか、状況に応じて適宜改訂を行い、会員にとっては利便性と即時性、初めて訪れる一般の方にはブリッジの魅力がわかりやすく伝わるよう、内容の充実化につとめた。また、昨年度に決定した全面リニューアルの方針を受け、月次更新コストを低く抑えつつ、様々な閲覧者のニーズに応え、ブリッジ愛好者の増加につながるようなサイトへと進化させていくことを目標に掲げ、閲覧者ニーズを把握するためのウェブアンケート調査を実施し、改訂策の検討と業者選定を行った。

[事業内容]

- (1) ウェブサイト月次更新
- (2) リニューアル業者の選定

サイトのリニューアルと管理を委託する業者の選考はコンペティション形式で実施することとし、4業者によるプレゼンテーションコンペを実施した。内容を検証した結果、使用システム方式、即時性、事務局作業の効率性、ランニングコスト軽減の観点から、全面CMSシステムを提案した㈱ソフトクリエイトを選定、理事会の承認を得て準備作業を開始した。

【 主な決定理由 】

- 1) 全面 CMS (Contents Management System) 方式導入で、「情報提供の即時性」、「扱い易さ」、「中・長期的なコスト削減」が見込める。⇒ 従来の HTML 方式は事務局内に扱える人間が 1 人しかいなかったが、新方式ではすべての事務局員が作業できるようになることから、業者を通さずに迅速な更新が常時可能になる。
 - 2) 運営コストの大幅な削減
 - 業者に依頼して更新してもらう必要がなくなる
⇒ 月次更新料 (約 ¥13 万 / 月、年間 ¥156 万) が不要に
 - 事務局内での新ページ作成が可能になる ⇒ 臨時ページ製作費が不要に
 - 月次経費としては、更新料に代わり、CMS-ASP 利用料、セキュリティー関連費用、および年間定額のドメイン・SSL 費用が発生するが、初期費用を除いたリニューアル後の年間経費は従来と比べ約 ¥96 万の減となる。
- ※ 7 月より、準備作業を本格的に開始し、12 月初めの完成を目指す。

管理費 【32,107 千円 / 予算 34,243 千円】

1. 各種講習会への会場の提供

2. その他目的達成に必要な下記経費

職員給料 / 臨時雇賃金 / 退職給付 / 福利厚生費 / 旅費交通費 / 通信運搬費 / 消耗品費 / 会議費 / 図書資料費など、普及・出版・広報活動に必要な経費

以 上

競技会事業部

1. コントラクトブリッジ競技会の主催と公認

【収入 171,423 千円／予算 178,450 千円】

競技会の開催と公認については、本年度は以下の事業を実施した。

(1) 競技会的主催 (収入 48,070 千円／予算 51,032 千円)

1) ナショナル (全国大会) 競技会 (収入 30,364 千円)

競技会名	日 程	参加テーブル数	(前年度)
玉川高島屋S・C杯	4月17、18日	86	(85)
文部科学大臣杯関東予選	5月 8、9、15、16日	65	(74)
藤山杯	7月 3、4日	126	(116)
外務大臣杯	8月21、22日	62.5	(58.5)
高松宮記念杯	9月18、19、20、25、26日	105	(102)
全日本女子ペア選手権	10月23、24日	128	(141.5)
高松宮妃記念杯	11月 6、7日	86.5	(85)
N I S S A Nブルーリボン杯	12月23日	115.5	(123.5)
レッドリボン杯	12月23日	38.5	(40.5)
朝日新聞社杯	1月 8、9、10日	162	(161)

2) リジョナル競技会 (収入 15,792 千円)

競技会名	日 程	参加テーブル数	(前年度)
柳谷杯	4月 3、4日	131	(135)
サントリー杯	4月29日	117.5	(117.5)
日本航空杯	5月29、30日	65	(64.5)
モンタルト杯	7月24、25日	35	(38)
丸の内杯関東予選・決勝	8月28、29日	8	(9)
夏季シニアペア	8月28日	18	(0)
夏季シニアチーム	8月29日	13	(7)
萩原杯	10月 2、3日	101	(99)
服部杯	12月 2日	148.5	(172.5)
春季リジョナル	3月19、20日	中止	(30)
渡辺杯	3月26、27日	42	(52)

3) 日本リーグ (収入 3,360 千円)

日本リーグ1部、2部	前期、後期	40	(40)
------------	-------	----	-------

4) 社会人リーグ (収入 288 千円)

社会人IMPリーグ	11月～ 3月	16	(16)
-----------	---------	----	-------

5) 参加料割引 (△1,734 千円)

(2) 競技会の公認 (収入 120,478 千円／予算 124,758 千円)

1) ナショナル競技会 (収入 1,252 千円)

NRM 杯、任天堂杯並びに主催ナショナル競技会 予選を含む19競技会を公認		117.5	(168.5)
--	--	-------	---------

2) リジョナル競技会 (収入 5,680 千円)

主催リジョナル競技会予選を含む50競技会を公認		1,408	(1,304)
-------------------------	--	-------	---------

3) セクショナル競技会 (収入 93,943 千円)

1,861競技会を公認		32,288.5	(32,097)
-------------	--	----------	----------

4) ローカル競技会 (収入 2,989 千円)

425競技会を公認		3,024.5	(2,899)
-----------	--	---------	---------

5) IMP リーグ (収入 28,769 千円)

5月～9月		2,552	(2,585)
-------	--	-------	---------

国際交流事業部

1. 国際試合へ日本代表の派遣と選抜【支出 6,592 千円／予算 4,832 千円】

定款第5条(5)に定める「コントラクトブリッジを通しての国際交流」については、本年度は以下の事業を実施した。

(1) 第47回太平洋アジアブリッジ連合(PABF)選手権への代表派遣および運営協力 (支出4,285千円／予算3,093千円)

会 期：平成22年5月21日～30日

会 場：ハミルトン（ニュージーランド）

事業内容：1) オープン、レディスおよびシニアの代表チーム派遣

結 果：オープンチーム（キャプテン林伸之、メンバー井野正行、寺本直志、加来浩、古田一雄、河野誠、横井大樹）は参加13ヶ国中4位に入賞した。
レディスチーム（キャプテン宮国健次、メンバー宮国亜矢子、福吉由紀、近藤久子、勝部雅子、小林弘子、塚本千寿子）は参加国が3ヶ国しかなく、シニア（10チーム）と共通の総当たり1回戦のあと、レディスのみの総当たりを4ラウンドずつ行い優勝した。
シニアチーム（山田彰彦、大野京子、中村嘉幸、平田眞、吉田正）は6ヶ国10チーム中2位に入賞した。

事業内容：2) PABF代表者会議へ役員派遣

結 果：大会会期中に開催されたPABF代表者会議に宮国健次副会長がPABF幹事長、吉田正事務局長がPABF事務局、平田眞常任理事および古田一雄理事が代表委員として出席した。

(2) 世界選手権への参加料助成（支出501千円／予算300千円）

会 期：平成22年10月1日～16日

会 場：フィラデルフィア（アメリカ）

事業内容：第13回ワールドブリッジシリーズへの日本からの参加者に対し、予選を通過したペア／チームに参加料の助成を行う。

結 果：日本から出場し予選を通過した12名に参加料の助成を行った。

(3) 国際試合への派遣（支出885千円／予算0千円）

事業内容：各国ブリッジ組織から日本代表チームへの招待があった場合チームを派遣する。

結 果：平成22年8月31日～9月5日に寧波（中国）で開催された第1回アジアカップ選手権に日本オープンチームのメンバー5名（井野正行、寺本直志、加来浩、古田一雄、横井大樹）を派遣し、航空運賃の助成を行った。

(4) 第48回APBF選手権日本代表選抜試合（収入630千円／予算720千円）（支出613千円／予算878千円）

会 期：平成22年11月20, 21日、12月11, 12日

会 場：四谷ブリッジセンター

事業内容：1) 平成23年にマレーシアで開催予定の第48回APBF選手権に参加するオープン、ウィメンズ各1チームを選抜

2) 選抜試合参加者への交通費と宿泊費の助成

3) 代表チームへの国内試合参加料、練習会費用の助成

結 果：【オープン】3チーム18名が参加し、井野正行、今倉正史、寺本直志、加来浩、古田一雄、横井大樹の6名を代表に選抜した。

【ウィメンズ】4チーム24名が参加し、西田奈津子、坂本みどり、島村京子、伴野和子、高崎恵、柳澤彰子の6名を代表に選抜した。

(5) 代表チームユニフォーム助成（支出308千円／予算560千円）

事業内容：日本代表メンバーにユニフォームとエンブレムを支給した。

2. 第16回 NECブリッジフェスティバルの開催

【収入合計 9,734 千円／予算 13,500 千円】

【支出合計 22,985 千円／予算 24,095 千円】

会 期：平成23年2月8～13日

会 場：横浜国際平和会議場

事業内容：国外の一流チームを招待して日本人プレイヤーの技量向上と国際交流の促進をはかる。

結 果：1) NEC杯：平成23年2月8日～12日

(収入2,002千円／予算2,400千円)

国外の15の国と地域からのプレイヤーで構成される17チーム（中国女子、台湾、インドネシア、英国、英国／オランダ、ブルガリア、カナダ／インド／スウェーデン、オーストラリア×2、英国女子、インド、スペイン＝以上招待チーム、中国×4、韓国）、国内参加チーム31チームの合計48チームが参加し、英国／オランダチーム（David Bakhshi, David Gold, Louk Verhees, Ricco van Prooijen）が優勝した。

2) 横浜SRR&スイスチーム：平成23年2月11日、12日（61チーム）

(収入1,840千円／予算2,800千円)

優勝：Xu Qun, Zhang Yu, Nie Weiping, Wang Xiaojing, Dai Jianming, Zhuang Zejun

3) 飛鳥杯：平成23年2月13日

(収入922千円／予算1,300千円)

156ペア参加、陳大偉－平田隆彦ペアが優勝。

4) BIGLOBEシリーズ：平成22年9月～12月

(収入4,156千円／予算6,500千円)

31クラブで453回開催、延べ16,482名参加

5) NECブリッジ体験教室の開催（普及事業部扱い→普及事業部で報告）

3. その他国際交流事業の目的を達成するための事業

本年度は、国際交流事業の目的を達成するために必要な事業として、以下の事業を実施した。

(1) 世界同時大会への参加（収入407千円）

会 期：平成22年6月4日、5日

会 場：公認クラブ、ブリッジセンター

事業内容：平成22年6月4日および5日に開催される世界同時大会に参加協力した。

結 果：6月4日（金）＝13クラブ、526名参加

6月5日（土）＝12クラブ、336名参加

(2) APBF同時大会への参加（収入763千円）

会 期：平成22年11月～平成23年4月

会 場：公認クラブ、ブリッジセンター

事業内容：平成22年11月～平成23年4月まで毎月第1金曜日／土曜日に開催されるAPBF同時大会開催に参加協力した。

結 果：11月＝16クラブ、582名参加

12月＝16クラブ、562名参加

1月＝15クラブ、614名参加

2月＝16クラブ、612名参加
3月＝15クラブ、554名参加
(4月＝15クラブ、530名参加)

(3) WBFチャリティペアへの参加（収入416千円）

会 期：平成23年1月24日～29日

会 場：公認クラブ、ブリッジセンター

事業内容：平成23年1月24日～29日に開催されたWBFチャリティペアに参加協力し、公認料全額と寄附金をEcatsbridge経由でユニセフに寄附を行った。

結 果：1月24日＝2クラブ、104名参加

1月25日＝1クラブ、58名参加

1月26日＝4クラブ、192名参加

1月27日＝5クラブ、180名参加

1月28日＝6クラブ、212名参加

1月29日＝3クラブ、62名参加

(4) 海外競技会に参加する会員の支援と海外への情報提供と収集

1) ACBLとの提携の継続・強化：ACBL競技会を会報で紹介
会報にACBLナショナルの日程を掲載した。

2) APBF加盟国競技会の開催情報の提供

香港インターシティ、ASEAN選手権などの開催情報を会報およびJCBLホームページに掲載した。

3) 各国ブリッジ組織とマスターポイント相互承認協定の締結交渉

ACBLの会員となっているJCBL会員・会友のマスターポイント情報を定期的にACBLに送付し、みなしマスターポイント（Eligibility Points）として登録している。

4) JCBLホームページを通して海外に情報を提供するとともに、ブリッジ関連ホームページから情報を収集し、会員に提供する。

競技会案内とNECブリッジフェスティバルの英文情報をウェブサイトで公開した。

また、WBF、ACBLなど主要ブリッジ団体のウェブサイトにもリンクした。

(5) APBFコンGRESS福岡大会開催準備（支出2,210千円／予算5,430千円）

事業内容：2012年に福岡で開催予定の第7回APBFコンGRESSの準備作業を実施した。

(6) その他目的達成に必要な経費（支出3,079千円／予算2,660千円）

交通費、通信費、会議費等の国際交流事業部の活動に必要な経費を支出した。

その他の事業

1. その他連盟の目的を達成するための管理部門を含む事業

【支出46,054千円／予算31,532千円】

本年度は、目的を達成するために必要な事業として、以下の事業を実施した。

(1) 事務局（一般管理費）の維持

理事会の管轄の下に事務局を設置して諸事業活動を支援した。

平成22年度重要業務

4月 1日 職員に平成22年度辞令交付

新日本監査法人による現金実査、商品棚卸実施

17日 新日本監査法人、監事立ち会いで平成22年度決算書作成、監査

30日 第29回会員総会開催通知発送

5月29日 第29回会員総会開催、182名参加

5月31日 平成21年度決算書を四谷税務署、新宿都税事務所に提出

6月15日 文化庁文化部芸術文化課に、平成21年度事業報告及び収支決算報告書、平成22年度事業計画及び収支予算届、登記事項変更登記完了届を提出

8月17日 文化庁文化部芸術文化課に文部科学大臣杯終了届を提出

11月26日 文化庁文化部芸術文化課に特例民法法人現状調査票を提出

(2) 収益事業の運営（収益事業特別会計に計上）

1) 商品販売事業

ブリッジ用品および書籍の販売と仕入れを行った。収支については収益事業決算書を参照されたい。

2) 四谷ブリッジセンターとの提携

NPO法人四谷ブリッジセンターとの業務契約書に基づいて協同して会場施設の運営とブリッジの普及・振興に務めた。

(3) 基金の運用

主催クラブの指定により、ローカル並びにクラブ選手権試合の公認料を次の基金の資金に充当して各種活動を支援した。

チャリティ基金（5,600千円／残高：1,209千円）

日本赤十字社等の各種団体のほか、東日本大震災、パキスタン洪水被害に次のとおり寄付した：

東日本大震災義援金 3,000,000円（＋一般会計から700万円）

パキスタン洪水義援金 1,000,000円

全国視覚障害者雇用促進連絡会 200,000円

プラン・ジャパン 200,000円

（旧日本フォスター・プラン協会）

朝日新聞厚生文化事業団 100,000円

讀賣光と愛の事業団 100,000円

日比パガサの会	100,000円
高松宮妃癌研究基金	200,000円
癌研究会	150,000円
日本赤十字社	100,000円
アイメイト協会	100,000円
あしなが育英会	100,000円
日本イコモス国内委員会	100,000円
横浜音声訳グループやまびこ	50,000円
国連WFP協会	50,000円
Room to Read	<u>50,000円</u>
合計	5,600,000円

九州支部

1. 総括

九州支部長以下、メンバーが交代して新体制となり、支部の再組織化からスタートした中で、APBF コングレス福岡大会の成功を中期的な目標として、昨年度までの活動を継続、あるいは更に発展させてきた。また、福岡ブリッジプラザや地元プレイヤーとの連携も積極的に進め、着実な成果をあげることができた。

2. 主な取り組みと成果

(1)普及事業

設立 5 年目となった今年度は、第 7 回 APBF コングレス福岡大会の成功を目指し、支部の陣容を一新してブリッジの普及事業・広報事業に一段と力を入れ、また、地元福岡で組織された外部支援組織である「APBF2012 福岡委員会」とともに支援事業の具体的検討を進めてきた。

その成果として、平成 23 年 4 月より福岡大学経済学部で提供講座「特別演習 I : 国際人の教養！コントラクトブリッジを学ぶ！！」が開講される運びとなり、3 月には、同委員会の河部浩幸委員長（福岡商工会議所会頭）が記者発表を行った。その後、キャビンアテンダントの専門学校からも講座開講の依頼を受けるなど、大きな反響があった。

また、九州で初めて学校の課外活動にブリッジを取り入れた板付中学校国際交流部に用具を寄贈するなど、学校教育現場での普及活動に努める一方、ミニブリッジ普及のためのボランティア育成を目指し、前年に引き続きミニブリッジインストラクター養成講座（3 期生 20 人、4 期生 8 人）を開催した。さらに、その受講者を中心に一般参加者に呼び掛けて、福岡ブリッジプラザでミニブリッジ土曜サロンやミニブリッジ大会「緒方杯」を開催するなど、草の根レベルでカード愛好者を増やす取り組みを継続的に行った。そのほか、福岡ブリッジプラザの広報活動を支援するとともに、三池カルタ・歴史資料館でミニブリッジ講座、熊日生涯学習プラザで入門講座を開催した。いずれについても、参加者のブリッジへの関心は高く、新年度以降の地域の拠点作りにつながるものと期待される。

広報活動では、多くの方々のご協力をいただきながら支部会報 8 号、9 号を発行した。支部会報は、福岡市文化振興課のご協力を得て福岡市内のすべての公立小・中学校、公民館等へ配布したほか、地元関係者、さらには全国のブリッジ関係者にも配布し、大きな反響があった。支部会報に加え、連盟会報「JCBL BULLETIN」上の「九州支部だより」コーナーを活用した情報発信も、昨年に引き続き行った。

(2)競技会事業

第 3 回山笠リジョナル・テレビ西日本杯（7 月）に韓国から 2 チームを招待した。APBF コングレスを控え、国際親善の絆を深める大会になった。

主な活動事業

■社会教育・学校教育での普及活動（ミニブリッジ一日体験教室開催等）

テレビ西日本杯体験教室	7月10日	3名参加
サンルート熊本体験教室	7月30日	10名参加
板付中学校へブリッジ教材・用具一式を寄贈	12月22日	
西日本新聞社杯体験教室	3月5日	3名参加
三池カルタ・歴史資料館ミニブリッジ講座(全3回)	1月21日～3月25日	13名参加
熊日生涯学習プラザ(全6回)	3月13日～新年度	15名参加

■ミニブリッジインストラクター養成講座

第Ⅲ期	：	前年度	3月20日～	5月15日(全5回)	20名参加
第Ⅳ期	：	1月15日～	2月19日(全5回)		8名参加

■広報活動

支部会報 第8号 2H（ツーハート）	（8月1日発行）
支部会報 第9号 2S（ツースペード）	（12月22日発行）
福岡大学提供講座報道発表	（3月23日）
西日本新聞、朝日新聞2紙 3月24日朝刊に記事掲載	

■主催大会実績

競技会名	開催日	会場	参加数
第3回テレビ西日本杯	7月11日	TNC放送会館	19チーム
第5回西日本新聞社杯 （九州リジョナルペア戦）	3月6日	福岡交通センター	41ペア
ミニブリッジ大会「緒方杯」	5月29日	福岡ブリッジプラザ	10ペア
ミニブリッジ大会「夏休み大会」	7月31日	福岡ブリッジプラザ	10ペア

福岡ブリッジプラザ

1. 総括

今年度は、平成 24 年度にプラザの収支を均衡させるという目標に向け、従来からの活動を充実させる方向で継続してきた。収入については、予算 9,246 千円に対して決算 9,063 千円で、講習会及びウィークリーの収入が計画を下回った。支出は、予算 10,715 千円に対し決算 11,315 千円であった。アシスタントなどの臨時雇賃金や講師謝礼などの人件費増が支出増の主要因となった。収支は 2,252 千円の赤字となったものの、前年度に比べて赤字幅は 600 千円ほど改善した。

組織的な運営体制の構築については、残念ながら、本年度中は人材確保など種々な課題を解決することができなかった。来年度も引き続きこれらの課題の解決策を検討し、組織的な運営体制の確立に向けての取り組みを継続していく。

2. 主な取り組みと成果

個別事業を見ると、普及の原点ともいえるべき無料体験教室の参加者を増やすことができなかった。この影響により、入門講習会の受講者数も計画をかなり下回った。

サロンについては、計画の 3 分の 2 しか達成できなかったが、プレイ、コンベンションなど、具体的なテーマを設定した講習会に近いサロンは人気が高いことから、この辺りに今後の参加者増の糸口が見出せそうである。ただし、講師などの人材確保と講習会とのバランスの調整が課題となつてこよう。

レベルアップ講習会では、入門講習会修了者に対して経過 6 ヶ月毎にメニューを用意しており、概ね 24 ヶ月位まではステップアップできるシステムとなっている。中級講座では特定テーマを設けていることが奏功し、他の講習会に比べ参加者が多くなってきている。通常の講習会は終えたが、独学できるほど力をつけていない層が結構厚いと思われるので、この層を対象とするメニューを用意すべきであろう。

IMP リーグの参加チーム数は、順調に計画をクリアしてきている。

[主な事業活動]

1. 普及事業

(1) 無料体験教室

9 月の体験教室：参加 14 名（計画 30 名） 知人 5、タウン誌 6、他 3
3 月の体験教室：参加 7 名（計画 30 名） 知人 3、タウン誌 4

(2) 入門 1 講習会

4 月～9 月の入門講習会：5 名受講 知人 2、タウン誌 1、他 2（計画 15 名）
10 月～3 月の入門講習会：8 名受講 知人 4、タウン誌 1、他 3（計画 15 名）

(3) 外部入門講習会

西高宮公民館他
サロン
月曜～金曜延べ 1,191 名（計画 1,800 名）

- (4) レベルアップ講習会等
- | | |
|------------------|-----------------------|
| 入門 2 (6 ヶ月経過) : | 年間延べ 201 名 (計画 200 名) |
| 初級 1 (12 ヶ月経過) : | 年間延べ 136 名 (計画 200 名) |
| 初級 2 (18 ヶ月経過) : | 年間延べ 148 名 (計画 200 名) |
| 中級 (上級を目指す) : | 年間延べ 448 名 (計画 200 名) |

2. 競技会事業

(1) ウィークリーゲーム

月曜午後：平均 3 テーブル 延べ 520 名 (計画 450 名)

火曜午後：平均 2 テーブル 延べ 402 名 (計画 900 名)

水曜午後：平均 3.5 テーブル 延べ 606 名 (計画 600 名)

(2) ローカル

土日ローカル：月 2 回 平均 8 テーブル 延べ 760 名 (計画 720 名)

火曜ローカル：月 1 回 平均 3.5 テーブル 延べ 168 名 (計画 200 名)

金曜ローカル：月 1 回 平均 6.2 テーブル 延べ 298 名 (計画 240 名)

(3) IMP リーグ

新人リーグ：6+4=10 (計画 4 チーム×2)

火曜リーグ：4+3= 7 (計画 4 チーム×2)

金曜リーグ：8+6=14 (計画 5 チーム×2)

土日リーグ：6+6=12 (計画 5 チーム×2)

(4) セクショナル

イーブンチャンス：2 回 17T (計画 8 回)

ハンディキャップペア：1 回 7T (計画 2 回)

新人セクショナル：1 回 6T (計画 1 回)

その他：15 回 83.5T (計画 9 回)

(5) ナショナル(リジョナル)予選

文部科学大臣杯：予選なし：A、B、D (計画 2×2 テーブル)

外務大臣杯：4T (計画 4 テーブル)

高松宮妃記念杯：3T (計画 4 テーブル)

柳谷杯：4T (計画 5 テーブル)

玉川高島屋 SC 杯：3T (計画 2 テーブル)

全日本女子ペア 2.5 (計画 5 テーブル)

(6) 山笠リジョナル

リジョナル 1：17.5T リジョナル 2：18T TNC 杯：19T

新人ローカル 1：12T 新人ローカル 2：7.5T 新人セクショナル：8T

(7) 九州リジョナル

リジョナル 1：21T リジョナル 2：18T 西日本新聞社杯：20.5T

新人ローカル 1：8T 新人ローカル 2：6T 新人セクショナル：6T